

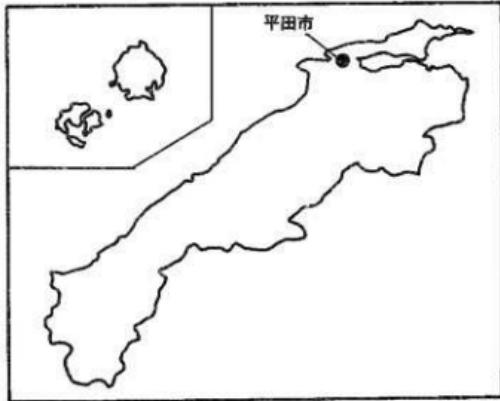
南灘古墓群

1989

島根県

平田市教育委員会

みなみ なだ
南灘古墓群



1989

島根県
平田市教育委員会

序

このたび、北浜地区小津町の重点保全地区総合治山事業にともない、南灘古墓群の調査を実施いたしました。普段見過ごしやすい五輪塔ではありますが、郷土の歴史を考える上で一つの史料と考え調査を実施する運びとなりました。狭い範囲の調査ではありましたが予想以上に多くの出土品をみ、小津町のみならず北浜地区の歴史を解明するうえでも貴重な成果があげられたと考えております。

最後になりましたが、調査にあたってご理解ご協力をいただきました土地所有者、地元工事関係者、出雲農林事務所をはじめ、ご指導いただきました島根県教育委員会の方々に厚くお礼申し上げます。

平成元年 3月

平田市教育委員会

教育長 金 築

一

例　　言

1 本書は重点保全地区総合治山事業に伴って平田市教育委員会が実施した南灘古墓群の発掘調査報告書である。

2 調査地は平田市小津町102番地ほかである。

3 調査体制

事務局 金築 一（教育委員会 教育長）

河村 英治（社会教育課 課長）

飯塚 八江（社会教育課 社会教育係 主任・前任）

佐藤 洋子（社会教育課 社会教育係 主任・後任）

調査員 原 傑二（社会教育課 社会教育係 臨時職員）

調査指導 烏谷 芳雄（島根県教育庁 文化課 主事）

4 調査にあたっては上地所有者をはじめ地元関係者・島根県出雲農林事務所及び平田市役所農林水産課の協力を得た。

5 本書の編集・執筆は、烏谷及び事務局の協力を得て原がおこなった。

6 遺物・図面等は平田市教育委員会で保管している。

7 挿図中の方位は磁北である。

目　　次

I	調査に至る経緯	1
II	位置と歴史的環境	1
III	古墓群の概要	4
IV	調査の概要	5
V	遺物の概要	
1	五輪塔	6
2	宝鏡印塔	9
3	須恵器	11
VI	まとめ	12

挿図目次

図1	周辺の遺跡 (1/5000)	3
図2	南灘古墓群位置図 (1/2500)	4
図3	A地点石塔出土状態図 (1/40)	4～5
図4	五輪塔実測図 (1) (1/8)	7
図5	五輪塔実測図 (2) (1/8)	8
図6	宝篋印塔実測図 (1/8)	10
図7	須恵器実測図 (1/2)	11

図版目次

図版1-1	遺跡遠景 (北西から)
2	遺跡遠景・工事終了後 (北東から)
3	A・B地点近景 (西から)
図版2-1	A地点近景 (東から)
2	A地点調査前 (北から)
3	A地点調査前 (北から)
図版3-1	B地点 (北西から)
2	C地点 (北から)
3	D地点 (東から)
4	D地点 (北西から)
図版4-1	A地点石積み全景 (北から)
2	A地点調査前 (西から)
3	A地点五輪塔除去後の様子 (西から)
図版5-1	△地点石積み内部の出土状況 (西から)
2	A地点石積み内部の出土状況 (北から)
3	A地点石積み内部の山上状況 (東から)
図版6	五輪塔
図版7	宝篋印塔・須恵器

I 調査に至る経緯

本調査は平田市小津町地内における重点保全地区総合治山事業に伴うもので、事業主体は島根県出雲農林事務所（以下、農林事務所という）である。事業は昭和62年度から4カ年計画で実施され、本年はその2年目にあたる。

昭和63年5月6日に農林事務所職員の立会いのもとに今年度工事実施箇所について分布調査を行い、尾根筋に古墳状の高まり1箇所と山腹斜面で五輪塔を4箇所確認した。

これらの取扱いについて5月25日、島根県教育府文化課の鳥谷主事に現地で指導を受けた。古墳状の高まりについては、まず古墳かどうかを確認する。五輪塔については、地表に出ているもの以外に、周辺にまだ埋まっているものがあるのかどうか。また、地下遺構が残存しているかどうかを確認する。そのため試掘調査を行う旨の指導を受けた。

これをもとに、6月10日から14日にわたって試掘調査を行った。その結果、古墳状の高まりは自然地形であり、五輪塔については周辺に埋まっているものではなく、地下遺構も残っていないことが判明した。これらの結果をもとに再度農林事務所と協議を行った結果、この工事は人命を保護するための地すべり防止工事であり、工事計画も地元からの強い要望でおこなわれており、工事を中止することや設計を変更することは難しいことがはっきりした。そこで、工事にかかる2箇所の五輪塔を本調査の対象とし、昭和63年9月に調査の費用は事業者負担ということで委託契約を行い、調査を実施することとなった。

II 位置と歴史的環境

南灘古墓群が所在する小津町は、市の北西部に位置する北浜地区にある。小津町は同町相代の山中に源をもつ相代川が十六島湾に流れ込む河口に位置しており、南北から山がせまっているため、相代川による沖積地も細長く形成されている。

今のところ町内では縄文・弥生時代の遺跡は知られておらず、古墳時代以降の遺跡のみである。

北許豆神社古墳（註1）は、標高約20mの丘陵斜面の、やや谷状になった北許豆神社（持田許豆神社）境内に位置している。大正18年の遷宮の時、拝殿や参道の移転工事を行

い、その時に古墳が発見、破壊されたようである。現在の本殿があるすぐ下の平坦面に古墳があったようである。主体部は横穴式石室で、石材の一部が参道の石段脇や本殿脇に置かれている。出土品としては須恵器の蓋環・壺蓋・甌・直刀・鎧が出土しており、山本編年（註2）の第Ⅲ期に相当すると思われる。これらの出土品は神社で保管している。

持田古墳は、標高約25mの丘陵斜面に位置している。急斜面のうえに烟になっていることもあり、墳形・規模等については不明である。主体部は横穴式石室と思われる。出土品としては、大形の提瓶が出土しており、北許豆神社（持田許豆神社）で保管している。

北ヶ谷古墳は、標高約30mの丘陵斜面に位置している。急斜面のうえさらにみかん畑になっていることもあり、墳形・規模等については不明である。主体部は横穴式石室で南南東に開口しており、玄室長1.70m、幅0.8m、高さ0.76mを測る。土器が出土しているらしいが、詳細は不明である。

恵比須神社古墳は、標高約10mの丘陵斜面の恵比須神社境内にあり、地元では「塩の権現さん」・「お忌みさん」と呼ばれている。墳丘の周囲がかなり削られているため、墳形・規模等については不明である。主体部は現状から判断すると主軸を東西におく箱式石棺とおもわれる。

小津町の西隣の十六島町には、箱式石棺の多井（森石）古墳（註3）がある。東隣の峠を越えた万田町には、墳形・内部主体とともに不明の観音神社境内古墳（註4）が知られている。

天平5（733）年に編纂された『出雲国風土記』によれば、この小津町一帯は楯縫郡の余戸里にあたる（註5）と思われる。

註1 山本 清・池田満雄（1969年）「第2編 平田市域の歴史 第1章 原始・古代」『平田市誌』 平田市教育委員会

註2 山本 清（1960年）「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』 島根大学
この論文は下記の単行本に収録されている。

山本 清（1971年）『山陰古墳文化の研究』 山本清先生退官記念論集刊行会

註3 註1と同じ

註4 註1と同じ

註5 加藤義成（1981年）『修訂出雲国風土記参考』 松江今井書店

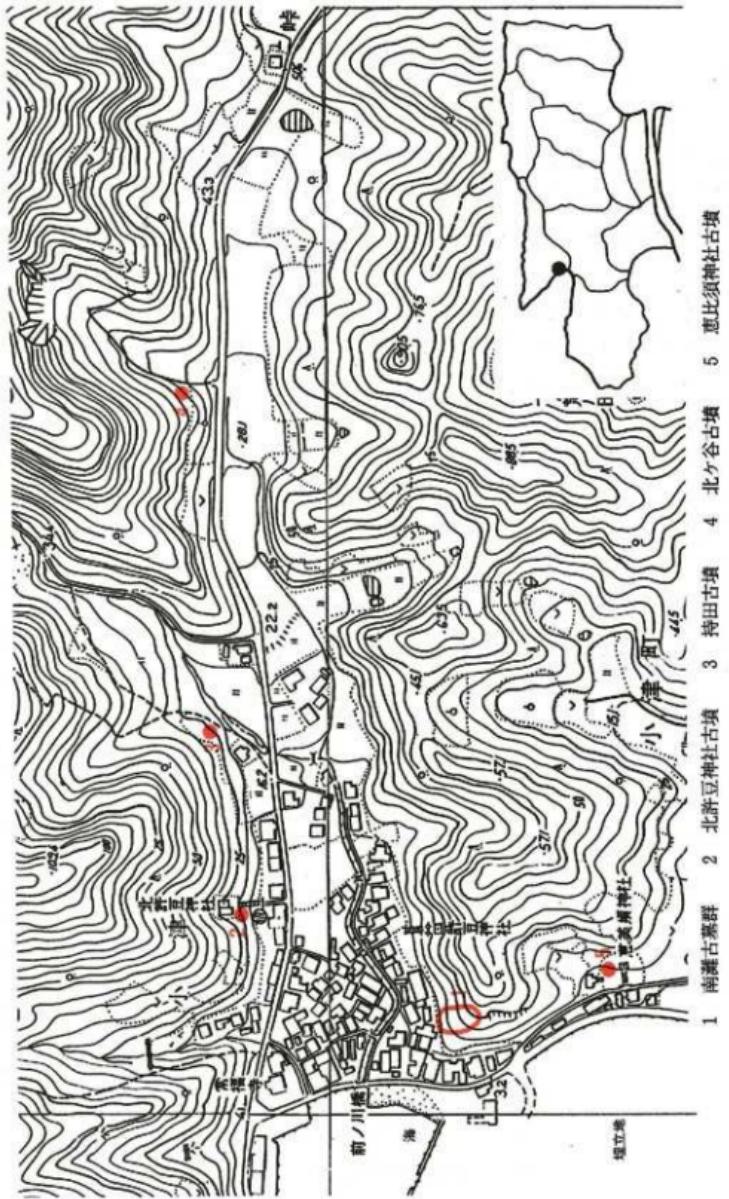


図1 周辺の遺跡 (1/5000)

III 古墓群の概要

古墓群は小津町字南灘に所在する。人家裏の標高10m～40mあまりの尾根北側斜面の4箇所に分布している。4つの古墓群のうち、標高の低い方からA・B・C・D地点と呼ぶこととした。(図2)

A地点

標高13mの斜面に位置する。丸石や瓦を積み上げてつくった長さ2.06m、幅1.23m、高さ0.57mの平坦面上に五輪塔の空風輪3点、火輪2点、水輪4点、地輪5点が集積されている。

B地点

標高15m、A地点の東約10mの斜面に位置する。五輪塔の空風輪1点がある。

C地点

標高25m、A地点から約12m高所の平坦面に位置する。ここには五輪塔の空風輪約18点、



図2 南灘古墓群位置図 (1/2500)

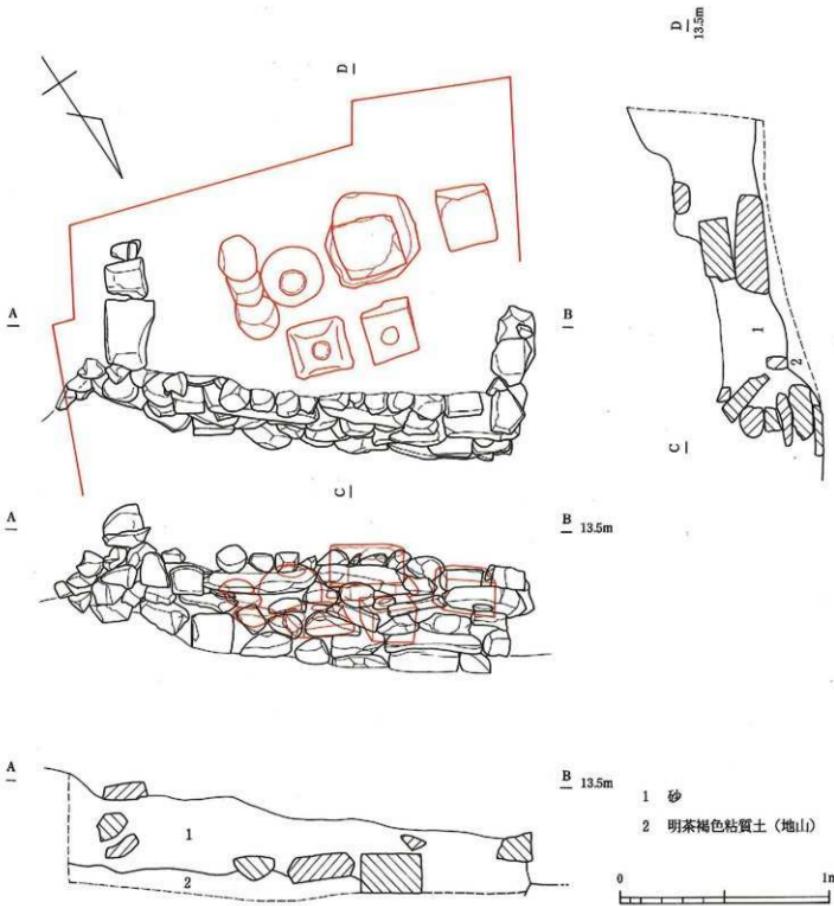


図3 A地点石塔出土状態図 (1/40)

火輪約7点、水輪約5点、地輪約4点、宝篋印塔の相輪1点が集積されている。

D地点

標高27m、C地点から約2m高所の平坦面に位置する。ここには五輪塔の空風輪約5点、火輪約16点、水輪約12点、地輪約16点が集積されている。

IV 調査の概要

工事にかかる地点はA・B地点であるので、この2地点について調査を行った。調査終了後、A地点の石塔はD地点の隣に移し、B地点の石塔はほぼ元の場所に戻した。

A地点（図3、図版1・2・4・5）

地主の福間新水（屋号・空）氏の話によると、もの心がついた頃にはすでにあり、先代あるいは先々代くらいが祀りはじめたのではないか、という事だった。

斜面の下方に右や瓦を0.57m積み上げ、長さ2.06m、幅1.23mの平坦面を作り、その上に五輪塔の空風輪3点、火輪2点、水輪4点、地輪5点が集積してある。

これらを取り上げた後に、平坦面の内部の砂を掘り下げたところ、さらに石塔が出土した。石塔は五輪塔の火輪1点、水輪1点、地輪3点、丸石3点で、横1.35m、縦0.9mの範囲に規則正しく並べられた状態で出土した。これらは、積み石の前面に対し西へ15度傾けて配置してある。いずれの石も地山（水分を多く含んだ明茶褐色粘質土）の上に置かれていたが、地輪の1つは厚さの薄い隅丸方形の石の上に置かれており、これのみが二段積みになっていた。この地輪のみが平坦面上に露出しており、これを土台にして、さらにこの上に石塔が積み上げられていた。

積み石を取り除き、内部から出土した石塔を取り上げた後、周囲を若干拡張して精査を行ったが、地下遺構は確認出来なかった。しかし、工事中に地表から1～2m下の地山部分から、五輪塔の空風輪1点、火輪2点、地輪9点と宝篋印塔の相輪1点、笠2点、塔身1点、基礎2点が出土した。

尚、排土中から須恵器片を1片採出した。

B地点（図版1・3）

地主の福間梅一（屋号・中空）氏の話によると、露出していたものを今の場所に祀ったもので、五輪塔の空風輪1点のみである。

V 遺物の概要

A・B地点からの出土品の総数は、五輪塔は空風輪5点、火輪9点、水輪7点、地輪17点の合計38点であり、宝篋印塔は笠2点、塔身1点、基礎2点の合計5点である。須恵器は1点である。これらのうち、残存状態のいいものを選んで図示した。

又、参考のためにC地点の宝篋印塔の相輪1点も図示した。

1 五輪塔（図4・5、図版6）

第4図の2はB地点のものであるが、その他はすべてA地点からの出土品である。

空風輪

1は全高25.2cmで細長い形をしており、2.1cm幅の溝によって空輪と風輪を区別している。空輪の高さ13.4cm、風輪の高さ19.6cm、最大径は空輪部分の下側にあり、長径15.6cm、短径13.9cmの楕円形をしている。柄の高さ2.2cm、最大径7.0cmで台形状を呈している。灰白色の凝灰岩製である。

2は全高23.4cm、全体がぐんぐりした形で、0.6cm幅の溝によって空輪と風輪を区別している。空輪の高さ9.1cm、風輪の高さ9.8cm、最大径は風輪部分のはば真ん中にあり、長径16.6cm、短径15.6cmの楕円形をしている。柄の高さ4.0cm、最大径7.8cmで台形状を呈している。凝灰質砂岩製である。

3は全高37.9cmで、1、2と比較して大形で直線的な形をしており、頂点から4.0cmの部分に稜線がつく。又、頂部には径5.0cm、深さ0.3cmの窪みがあるが、人為的なものか欠損によるものなのかは不明である。2.6cm幅の溝によって空輪と風輪を区別している。空輪の高さ17.3cm、風輪の高さ13.0cm、最大径は空輪部分の上部にあり長径20.7cm、短径19.8cmの楕円形をしている。柄の高さ5.0cm、最大径9.6cmで半円形を呈している。凝灰質砂岩製である。

火輪

4は幅30.9cm、笠高は17.4cmである。軒中央の高さ5.9cm、軒先は現存高9.5cmで反っている。頂部は現存幅12.0cmの平坦面で、ここに外径7.8cm、内径4.4cm、深さ4.5cmの円い柄穴を穿っている。底面は若干ふくらんでいる。灰白色の凝灰岩製である。

5は幅24.3cm、笠高は10.5cmである。軒中央の高さ3.6cm、軒先は現存高4.0cmで反っている。頂部は幅10.1cmの平坦面で、ここに外径6.5cm、内径5.0cm、深さ4.5cmの円い柄穴を

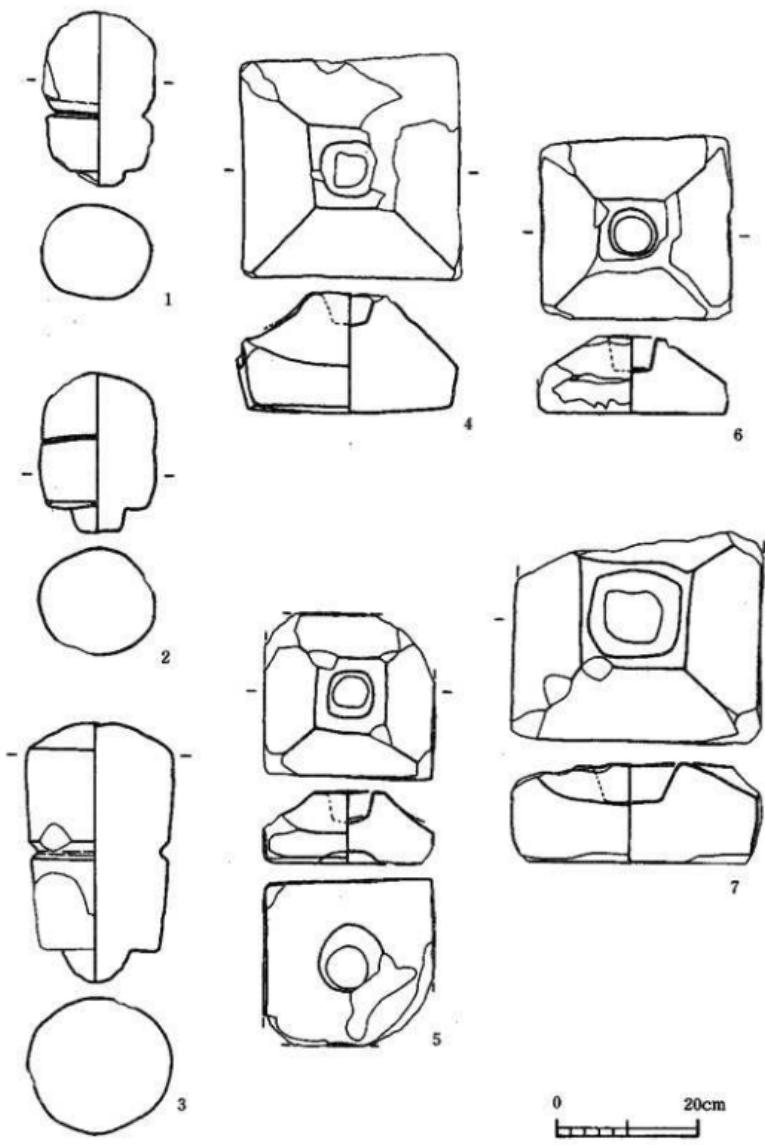


図4 五輪塔実測図(1) (1/8)

穿っている。底面は平らで外径9.7cm、内径6.0cm、深さ1.7cmの円い穴を穿っている。凝灰質砂岩製である。

6は幅26.8cm、笠高は11.1cmである。軒中央の高さ5.0cm、軒先は現存高5.5cmでほぼ直線である。頂部は現存幅9.6cmの平坦面で、ここに外径6.8cm、内径5.3cm、深さ5.0cmの円い枘穴を穿っている。底面は平らである。凝灰質砂岩製である。

7は幅34.8cm、笠高は14.3cmである。軒中央の高さ8.4cm、軒先は現存高13.0cmで反っている。頂部は幅15.2cmの平坦面で、ここに外径12.9cm、内径7.9cm、深さ5.5cmの円い枘穴を穿っている。底面は平らである。凝灰質砂岩製である。

水輪

8は高さ21.2cm、最大幅はほぼ中央にあり30.2cmである。上面は幅20.1cmの平坦面に、外径13.5cm、内径6.4cm、深さ4.7cmの円い穴を穿っている。下面是幅19.1cmの平坦面に、外径13.8cm、内径4.1cm、深さ5.4cmの円い穴を穿っている。灰白色の凝灰岩製である。

9は高さ18.3cm、最大幅はほぼ中央にあり32.6cmである。上面は幅21.7cmの平坦面で、全体的に深さ0.6cmほど掘りくぼめられている。下面是幅21.7cmの平坦面で、外径19.3cm、

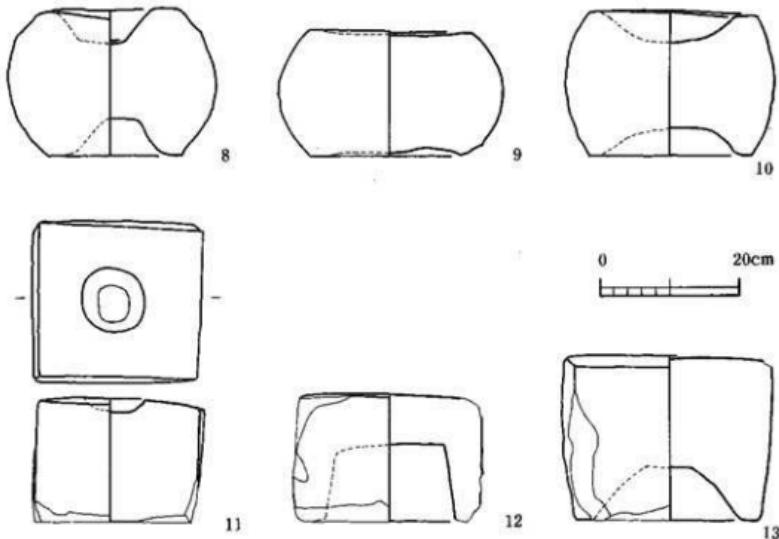


図5 五輪塔実測図(2) (1/8)

深さ0.4～1.1cmほど掘りくぼめられている。灰白色の凝灰岩製である。

10は高さ21.3cm、最大幅はほぼ中央にあり30.5cmである。上面は幅24.0cmの平坦面に、外径17.0cm、深さ4.8cmの円い穴を穿っている。下面是幅23.3cmの平坦面に外径20.6cm、深さ4.0cmの円い穴を穿っている。凝灰質砂岩製である。

地輪

11は高さ17.9cm、上面は幅23.2cmで、中央は端よりも0.9cmほど盛り上がり、外径9.4cm、内径5.5cm、深さ1.9cmの円い穴を穿っている。下面是幅23.2cmである。凝灰質砂岩製である。

12は高さ18.5cm、上面は現存幅26.3cmで、下面是現存幅26.7cmである。下面には現存外幅18.6cm、内輪15.2cm、深さ11.0cmの四角い穴を穿っている。灰白色の凝灰岩製である。

13は高さ24.1cm、上面は現存幅29.5cm、下面是現存幅25.9cmで、逆台形をしている。下面には外幅21.5cm、内幅6.1cm、深さ7.6cmの四角い穴を穿っている。凝灰質砂岩製である。

2 宝蓋印塔（図6、図版7）

第6図の1はC地点のものであるが、その他はすべてA地点からの出土品である。

相輪

1は現存高42.0cmである。宝珠・請花部分は高さ7.1cm、最大径13.6cmである。1.0cm幅の溝によって九輪部分と区別している。九輪は高さ23.9cm、最大幅16.5cmである。一輪一輪は6.5～1.0cm幅の溝で区別している。請花・伏鉢・露盤部分は高さ6.0cm、最大径16.4cmではば円形である。0.7cm幅の溝によって九輪部分と区別している。柄は現存高3.6cm、最大径8.8cmで半円形である。凝灰質砂岩製である。

笠

2は高さ20.4cm、現存幅30.7cmである。段形は下2段、上に見かけだけの2段、そして最上部に削り込みによって1段設けている。頂部の平坦面の現存幅は15.4cmである。底面は平らで現存幅は22.4cmである。隅飾は下の幅9.6cm、現存高13.5cmで外傾しており、内面を沈線で蕨手状の文様を彫り込んでいる。柄穴は隅丸方形で現存外径10.9cm、内径7.6cm、深さ5.0cmである。凝灰質砂岩製である。

3は現存高14.7cm、現存幅23.0cmである。段形は下2段、上に見かけだけの2段、最上部の段については、風化のため不明である。頂部の平坦面の現存幅は12.1cmである。底面は平らで現存幅は19.4cmである。隅飾は下の幅8.1cm、現存高8.0cmで外傾しており、内面は風化のためはっきりしないが沈線による蕨手状の文様を彫り込んでいるようである。柄

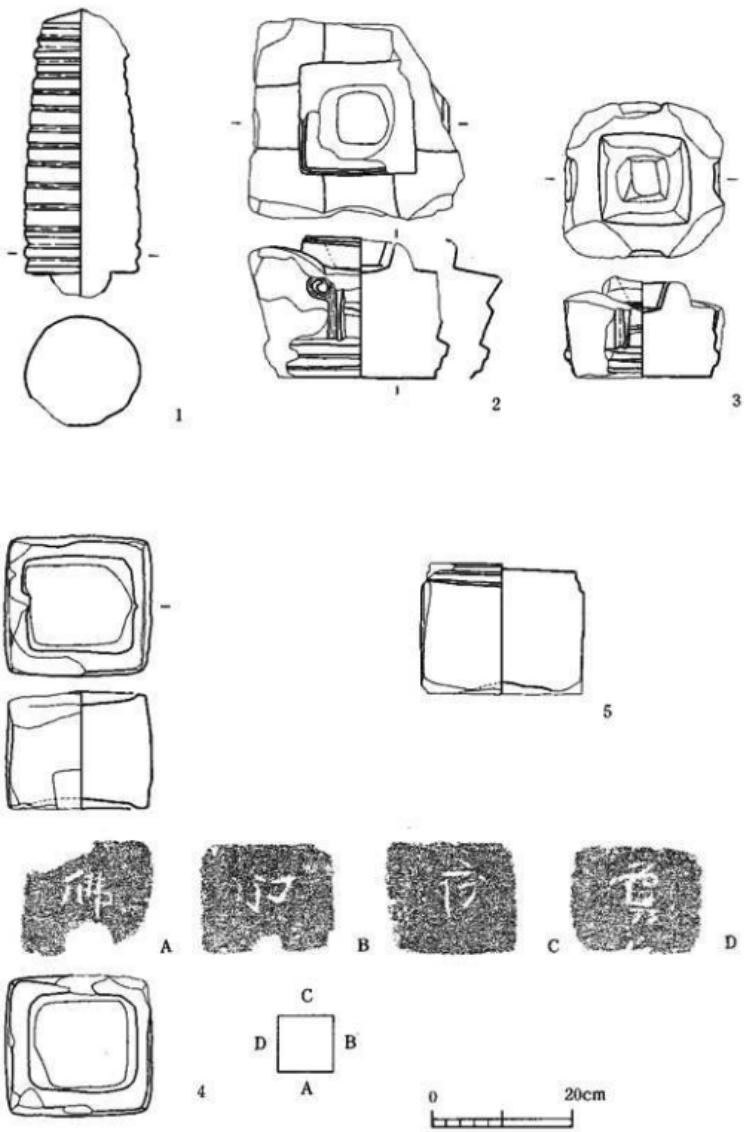


図6 宝篋印塔実測図 (1/8)

穴は隅丸方形で現存外径7.4cm、内径5.1cm、現存する深さ5.1cmである。凝灰質砂岩製である。

塔身

4は高さ16.8cm、幅20.5cmである。上面は現存幅18.8cm、下面は現存幅18.6cmである。上面には外幅15.2cm、内幅14.2cm、深さ1.9cmの隅丸方形の穴が穿たれている。下面には外幅15.1cm、内幅12.9cm、深さ1.3cmの隅丸方形の穴が穿たれている。側面にはそれぞれ文字状のものが彫られているが、「佛」以外は判読不可能である。凝灰質砂岩製である。

基礎

5は高さ18.9cm、上面は幅20.5cm、下面は現存幅23.5cmである。上面は二段式の簡略化したもので、下面には現存幅13.5cm、深さ1.6cmの穴が穿たれている。凝灰質砂岩製である。

3 須恵器(図7、図版7)

A地点から1片出土した。甕の肩の部分の破片で、肩部での直径は約15.4cm、厚さは約0.5cmである。外面は約5mmの格子目のタタキの後、不整方向のナデをおこなっている。このため格子目が菱形に変形している。内面の上方は横ナデで下方はクシメ状のナデの後、横ナデをおこなっている。胎土は1mm程度の砂粒を多く含み、焼成は良好で堅固である。青灰白色を呈する。



図7 須恵器実測図(1/2)

VI まとめ

石塔群について

土地所有者によると、もともとこの辺りの土地は滑りやすく豪雨の時に一晩で山が数m滑り落ちたことがあった、と話されたが、この話しからすると本来この石塔群はD地点のような高所にまとまっていたものが、地すべりにより散在してしまった。今のような状態になつたと考えられる。

したがってA地点の工事中発見の石塔は、地すべりした土の上にさらに地すべりの土が積み重なったため、このような出土のしかたをしたと考えたい。

これらのことから、当石塔群は原位置を保ったものとは考えられなく、また各石塔の組合せ関係も不明といわざるをえない。又、紀年銘をもつ石塔も出土していないため年代を決定することは難しいが、従来の研究をもとにすると形態の簡略化が著しいことから五輪塔・宝篋印塔ともに近世頃の時期を考えておきたい。(註1)

須恵器について

從来から亀山焼・勝間田焼と言っていたものであり、外面の格子目が大きく、焼成が良好なことから勝間田系との関連が考えられる。時期については鎌倉時代前後と考えられる。(註2)

最近このような石塔についての調査が増加しつつあるが、年代決定が難しいのが実情である。年代決定の基準資料となる紀年銘のある石塔や、参考資料となる伝承をもつ石塔を集めることにより、形態変化や法量変化を追求することが必要ではないだろうか。

註1 監修 井上光貞(1979年) 「図説歴史散歩事典」 山川出版社

坂詰秀一(1980年) 「図録 歴史考古学の基礎知識」 柏書房

杉原清・(1987年) 「IV出土遺物 4 宝篋印塔の比較」 『二反田古墓』 松江市教育委員会

註2 広江耕史・片岡詩子(1988年) 「島根県における古代末～近世にかけての須恵器について」 『中近世土器の基礎研究』 IV 日本中世土器研究会

図 版



1 遺跡遠景（北西から）



2 遺跡遠景・工事終了後
(北東から)



3 A・B地点近景
(西から)

図版 2



1 A 地点近景（東から）



2 A 地点調査前
(北から)



3 A 地点調査前
(北から)

1 B地点（北西から）



2 C地点（北から）



3 D地点（東から）



4 D地点（北西から）



図版 4



1 A地点 石積み全景
(北から)



2 A地点 調査前
(西から)



3 A地点 五輪塔除去
後の様子 (西から)

1 A地点 石積み内部の出土状況（西から）



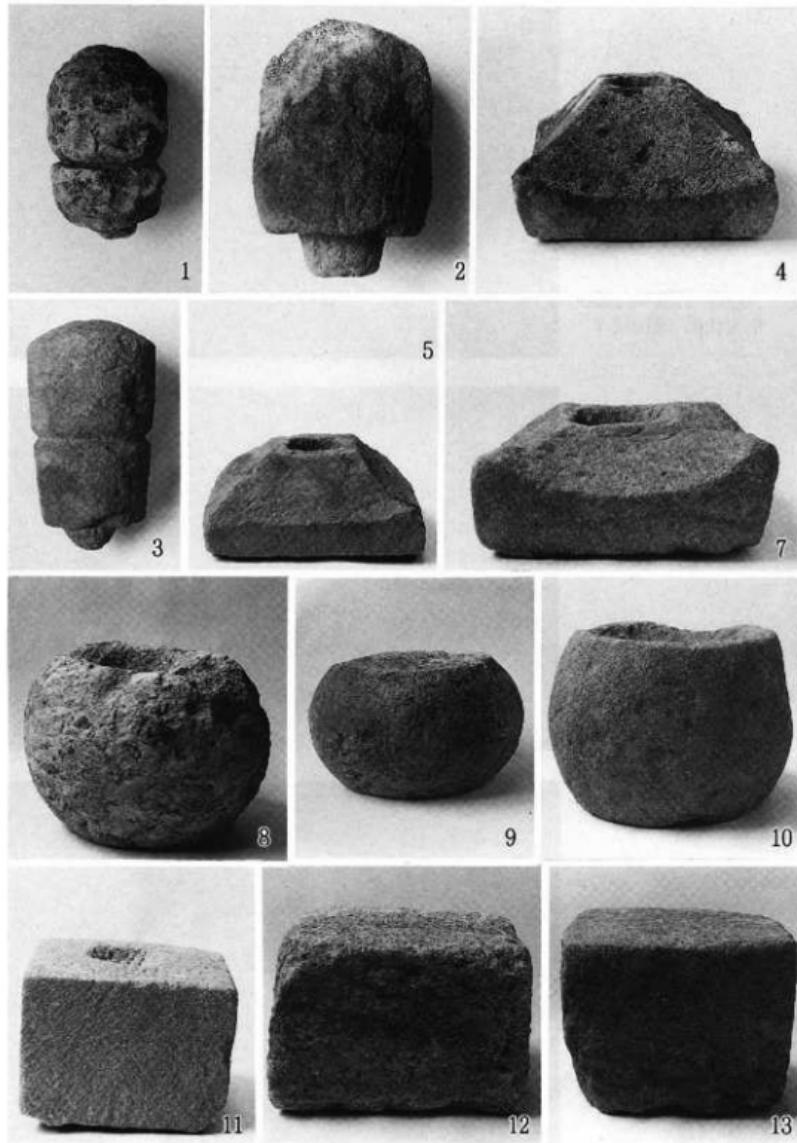
2 A地点 石積み内部の出土状況（北から）

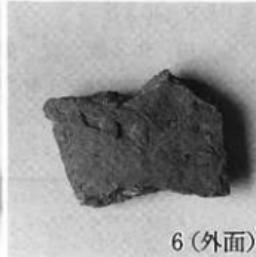


3 A地点 石積み内部の出土状況（東から）



図版 6





南灘古墓群

平田市埋蔵文化財調査報告書 第1集

発行 1989年3月

編集 平田市教育委員会

島根県平田市平田町2791番地1

印刷 株式会社報光社
